

「郷土舞踊と民謡の会」の理念と現実

——日本青年館所蔵資料と竹内芳太郎のノートから——

The Gap between the Ideal State and the Reality of *Kyōdo-Buyō to Minyō no Kai*
(Folk Dance and Song Festival)

黛 友明

MAYUZUMI Tomoaki

要 旨

「郷土舞踊と民謡の会」は、日本青年館が主催し、全国各地の郷土舞踊と民謡を日本青年館大講堂で披露した催しである。1925年10月の日本青年館開館式で第1回が行われたあと、翌年からは4月となり、1927年と1932年は中止となったが、1936年まで計10回開催された。現在も日本青年館で行われている全国民俗芸能大会のルーツとしてよく知られている。

本稿では、まず日本青年館所蔵資料から会場となった大講堂の性格と各事業との関連を検討した。大講堂は、日本青年館主催の行事で利用されるほか、他の団体に貸していた。中心は音楽会や各種団体の集会であり、公会堂や文化会館といった公共施設と同じような性格を有していた。郷土舞踊と民謡の会は、理念としては地方青年の健全な娯楽の振興を掲げていたが、実際にはモダンな空間において、都会人が地方・植民地の民俗芸能を鑑賞する催しであった。

ただ、そのような枠組みだけでは理解できないのが、記録事業としての側面である。日本青年館・大日本聯合青年団という組織が推進する事業であったために、多彩な研究者がそこに関わることもでき、様々な方法での記録化がなされていた。このことは現在の民俗芸能大会の起源ということのみならず、行政と連携して行われる「地域おこし」を標榜するイベントや、調査事業などの先駆けともいえるだろう。本稿では、特に工学院大学図書館竹内芳太郎コレクションのなかにあるノートを検討し、竹内を含む早稲田大学で今和次郎に師事した建築学系の研究者が果たした役割の大きさを指摘した。

【キーワード】 民俗芸能、民俗芸術の会、舞台公演、無形と有形、記録

1. はじめに

「郷土舞踊と民謡の会」は、日本青年館が主催し、全国各地の郷土舞踊と民謡を日本青年館大講堂で披露した催しである。現在も日本青年館で行われている全国民俗芸能大会のルーツとしてよく知られている。

だが、郷土舞踊と民謡の会に関する研究は多いとは言えない。画期となったのは、笹原亮二のまとめた研究〔1992a；1992b〕で、日本青年館と柳田国男の関係をとり上げた掛谷昇治〔1996〕も整理されている。しかし、それ以降停滞し、2000年代に入ってから、川村清志〔2006〕、出演地域から言及した久万田晋〔2007〕、木原弘恵〔2015〕、山崎達哉〔2016〕といったものがある。近年、目立ったものは、小寺融吉論〔鈴木 2015〕と、民衆芸術論やページェント運動といった演劇学の文脈で位置づけた研究だろう〔館野 2019〕。また、開催時期が重なっている、折口信夫が主導した民俗芸能上演についても小川直之〔2019〕が紹介している。

郷土舞踊と民謡の会は、催し物であるため、主催者だけではなく、出演者、観客がそれぞれの立場で関わっている。実に多様な人物が関与しているのである。同時代には、鉄道網の整備やマスメディア——とりわけラジオ放送の開始——によって、地方に残る民謡が脚光を浴び、「新民謡」に代表される民謡ブームが起こっていた。そのため、民俗学史のみで完結させることができない広がりの中で理解する必要がある。

本稿では、日本青年館所蔵資料と、建築家で民家や農村舞台の研究者であった竹内芳太郎が郷土舞踊と民謡の会を記録したノートを紹介しながら、この催し物を検討する。なお、以後、「第1回」「第2回」等と表記した場合は、郷土舞踊と民謡の会の各回を指している。また、当時は定着した言葉ではなかったが、便宜的に郷土舞踊と民謡を総称して「民俗芸能」と呼ぶこととする。

2. 日本青年館大講堂

ここでは、郷土舞踊と民謡の会の会場となった、日本青年館とその内部にある大講堂の性格について検討する。この作業によって、郷土舞踊と民謡の会を同時代の文化状況のなかで位置づける見通しが得られるものと考ええる。

日本青年館が、明治神宮外苑に建設されることになる直接のきっかけは、1920年11月に催された全国青年団明治神宮代参者大会で、皇太子（のちの昭和天皇）より令旨を受けたことによる〔大日本青年団編 1942：145〕。では、そのなかにある日本青年館大講堂はどのような構造だったのか。『財団法人日本青年館概要』（『大正十四年十月 開館式関係書類』所収、日本青年館所蔵、発行年不詳）によれば、明治神宮外苑の西隅に位置していた日本青年館は、4階建てだが、講堂や事務所などがある北半と、宿泊施設を中心とする南半に分けられ、後者には地下室があった。

日本青年館の正面玄関は、北側に設けられていた。入るとすぐに階段があり、昇っていくと2階の広間に出て、大講堂の入口があった。日本青年館2～4階の中央部分が大講堂にあてられ、宿泊施設のある南側が舞台となっていた（写真1・2）。『財団法人日本青年館概要』には次のように説明されている。

大講堂は長十三間幅十一間で之に座席を配置し其の前方には奥行約五間、間口六間の舞臺を附設して講演會、活動寫眞會、音樂會、演劇會等に必要な設備を施し、其の後方には棧敷二層を設けて座席を配置し、座席は總數一四八九人分で各階とも同一の體裁となし廻轉式長椅子とした。又床面竝に舞臺

下には送風口を、天井には排気孔を設け、送風機及排気機に依つて室内の換氣を行ふものとした。

大講堂は、講演会をはじめ、活動写真、音楽、演劇など娯楽を提供する場として想定されていた。実際、日本青年館の事業のなかにも、民衆教化や趣味向上のために活動写真上演や音楽会・演芸会の実施が組み込まれていた。もちろん、自ら企画するだけでなく、外部の団体が主催するイベントや行事にも会場として貸していた。

『財団法人 日本青年館七十年史』にある「旧館大講堂目的別利用状況（戦前）」という表には1927～39（昭和2～14）年までの催事別の開催数が示されている〔館史編纂委員会・編纂作業委員会編 1991：1319〕。集計が一貫していないのであくまで参考にとどめたいが、音楽会が3割以上を占め、年に70～130回程度開かれていた。続いて映画会、さらに「講演会研究会及祭典」となっている。1929年に日比谷公会堂ができるまでは音楽会の会場として親しまれていたようで、なかには日比谷公会堂よりも音楽会に適していると評したものもあった〔新藤 2014：191〕。

日本青年館が発行していた雑誌『青年』第11巻第6号の「館だより」によれば、3～4月中の主要な催事は、以下の通りであった。

音羽時雨舞踊其他、救世軍大デモンストレーション、山田耕作氏交響樂會、趣味の倶楽部音楽及筑前琵琶、豊多摩郡青年總會及音樂會、成城學園音樂會、義勇消防組頭總會、思想統一協會講演、第一師團主計團會議、同軍醫部總會、同團隊長會議、近衛第一師兩團講演會、尺八大會、市内旅館業組合勤續社員表彰式、太陽堂音樂會、全國教化團體聯合會講習會、熊澤氏琵琶劍舞其他、市内土木建築業組合會議、斯波代議士懇談會、大竹氏音樂會其他種々〔無記名 1926b：47〕

あくまで一部だが、大講堂が現在でいうところの公会堂や文化会館といった公共施設と同じように様々な団体が催し物を行う際に利用できる場所であったことがわかる。

しかし、日本青年館は、地方青年の自発性によって建設された施設という建前を持っていた。このような多種多様な催し物は、地方青年と関わりがあるものばかりではない。日本青年館が主催したものではないといえ、会場となっているということだけで、本来の趣旨に反するのではないかという危惧が懷かれてしまうこともあった。

「財団法人日本青年館 第八回評議員会記録」（1929年3月20日）では、「福島、中曾根君」が地方人として大講堂が利潤を追求するあまり、「青年教化」にふさわしくないことに利用されているのではないかと発言している。これについて、田沢義鋪理事は主催行事と他団体へ貸して行われる



写真1 大講堂の観客席（『日本青年館絵葉書』、個人蔵）

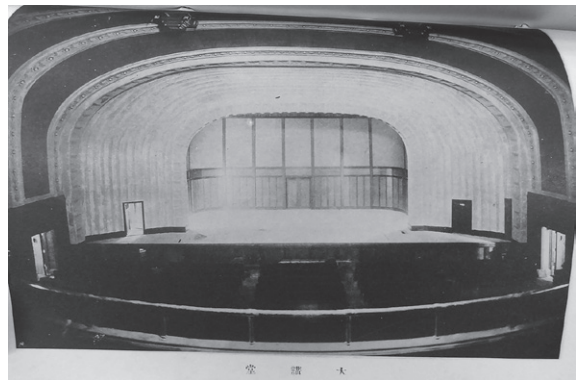


写真2 大講堂の舞台（『財団法人日本青年館概要』、日本青年館所蔵）

催しが混同されることが多いと述べ、「例へば此講堂ガ音楽ニ最モ適シテ居ルト云フノデ、音樂會ナドニ盛ニ使ハレマスガ、併シ会ニ集マツテ來ル者ノ容子、服装ナドガ、地方青年ノ集マル青年館トシテハ一寸不似合デハナイカト云フコトヲ聞クノデアリマス、是等ハ音樂會トシテ其内容ハ別ニ害モナク、又集マツテ來ル人達ノ態度モ都會ノサウ云フ人々ノ集マリトシテハ別ニ非難スベキデハナイノデアリマスガ、地方ノ青年ノ集會ト較ベルトソコニー寸變ナ氣ガスルト云フヤウナコトハ今日デモアルノデアリマス……」〔館史編纂委員会・編纂作業委員会編 1991：150-15〕と答えている。このような発言から、日本青年館大講堂を利用しての音楽会には、「地方青年」とは真逆の「都會ノサウ云フ人々」——より具体的にいえば都市中間層だろう——が集まっていることが裏付けられる。前述のように、音楽会が大講堂で最も多く開催されていた催事であったことを踏まえるならば、日本青年館大講堂に日常的にやってくるのは、帝都東京においてモダニズムを享受しうる都会人であったといえるだろう。

3. 舞台裏の実相

日本青年館開館式の一環として郷土舞踊と民謡の会が開催された理由については、笹原亮二によって、地方の娯楽の振興という青年団運動の文脈と、柳田国男をはじめとする郷土研究の文脈が日本青年館の職員であった熊谷辰治郎を接点として用意されたという前提があったことが指摘されている〔笹原 1992〕。これについて、近年、館野太朗は民衆芸術論争や坪内逍遙のページェント運動を掘り下げることで、郷土舞踊と民謡の会の顧問と舞台監督を務めた小寺融吉の役割の重要性を指摘している〔館野 2019〕。このことは、郷土舞踊と民謡の会の開催が、同時代の多様な文化状況の結集であることを考える上で見逃せないが、ここでは主催者である日本青年館側の文脈を確認しておきたい。

郷土舞踊と民謡の会の開催決定については、日本青年館職員であった熊谷辰治郎の回顧が最も詳細である。熊谷は、第3回を迎える前に発表した文章で、当時「民衆娯楽」という言葉が流行しており、自身も地方青年の健全な娯楽の振興に関心があったため、それを目的としたものであったと述べていた〔熊谷 1928〕。『大日本青年団史』に寄せた「回顧二十年」によれば、開館式にふさわしい催し物の案として、「野外劇」と「郷土舞踊と民謡」、「青少年資料展覧会」が出たという。そして、「青少年資料展覧会」は飽くまでも研究的な地味なもの、これと相対して郷土舞踊と民謡といふ素朴な、賑かな、しかも日本的な香りの最も高いものを紹介しよう」ということになった〔熊谷 1942：17-18〕。つまり、郷土舞踊と民謡の会と青少年資料展覧会がセットと考えられていたことがうかがえる。

熊谷の戦後の回想では、開館式の企画段階では、①皇太子行啓、②青年団の展覧会、③講演会、④記念行事が発案され、四番目は明治神宮の森を背景とした野外劇か、郷土舞踊と民謡かが議論され、「地方に埋もれている郷土舞踊民謡を開拓することは、地方に根をおろしている青年団として大いに意義ある」〔熊谷 1979：30〕ということでこれに決定した。

青年団と地方の文化の関係について、渡辺裕は青年団運動の中に「文化改良」を目指す娯楽観があったことを指摘している〔渡辺 2018：71-73〕。前述の館野は、「郷土舞踊」は小寺が広めた言葉であり、彼が発端であると述べているが、すでに笹原が指摘したように、以上のような熊谷ら日本青年館および青年団運動の意向があつてはじめてそれが受け入れられたことも見逃すべきではない。

郷土舞踊と民謡の会は、1925年10月の日本青年館開館式で第1回が行われたあと、翌年からは

4月となり、1928年は「諒闇」、1932年は「内外時局多端」のため中止となったが、1936年まで計10回開催された⁽¹⁾。ポスターとチラシ(写真3)は三越本店をはじめ、各所に配布されて宣伝され、新聞、ラジオ、『青年』をはじめとする雑誌などのマスメディアでその模様が伝えられた。毎回、30銭の解説が販売され、会場では青年団員の手で売り歩かれた(写真4。本報告書資料篇「日本青年館・大日本聯合青年団民俗学関連刊行物」参照)。

出演する民俗芸能の選出方法は、各府県と植民地(朝鮮・台湾)の行政に照会をかけ、その回答のなかから柳田国男、高野辰之、小寺融吉の審査顧問の意見をもとに行われた。しかし、実際には、そのような回答に寄らず、審査顧問の要望によって決定する場合もあった。

例えば、第3回には「八重山の民謡と舞踊」が出演しているが、これは柳田が八重山民謡の研究をしていた喜舎場永珣に直接出演の交渉を依頼していた[久万田 2007]。他にも、第8回の「朝鮮の豊年踊」は、小寺融吉が、「朝鮮

の仮面劇」を出演させたいと考え、朝鮮総督府に照会をかけ、そのアドバイザーとなることを朝鮮民俗学会の設立メンバーである宋錫夏に依頼したものであった⁽²⁾。

郷土舞踊と民謡の会は、第8回で「全国一巡」したとパンフレットに書かれ、そのように理解されることが多い。しかし、植民地を有していた当時の帝国日本の範囲は、現在とは異なっている。そのような前提で考えてみると、台湾の出演がないことが注意される。第8回のパンフレット『郷土舞踊と民謡』の「後記」をみていくと、「台湾と樺太」を除いた全国一巡が達成されたこととあり、当初から台湾も範囲に入っていたが、結局選ばれなかったことがわかる[神田編 1934]。その理由については明らかではないが、植民地での青年団運動や民俗学の展開などを踏まえて、今後検討すべき課題だろう。

次に、第10回の資料を用いながら、出演者のスケジュールを確認したい。表1は、『第十回郷土舞踊関係書類 其一』所収の日程表をもとに加筆して作成したものである。出演者は、5泊6日で日本青年館に滞在していた。8日は集合して準備、9日が試演、10～12日まで本番、13日が市内見学と会食後に解散というのが大まかな流れだった。9日の明治神宮参拝後の試演・トーキー撮影は、その境内で行われたものである。なお、表中の「AK」は東京放送局(当時は社団法人日本放送協会)のコールサインであったJOAKの略だろう。

これは、その時々事情で変更が生じたかもしれないが、すべての回で共通していたと考えられる。なお、1934年に行われた第8回の大講堂での試演については、写真が残されていることが、今回の調査でわかった(資料篇「第8回「郷土舞踊と民謡の会」写真」参照)。

かなり忙しいスケジュールだが、出演者はこの合間を縫って東京の同郷人の名士などのもとへ連れていかれたという[笹原 1992; 久万田 2007]。そのようななかで、第2回についての小寺の

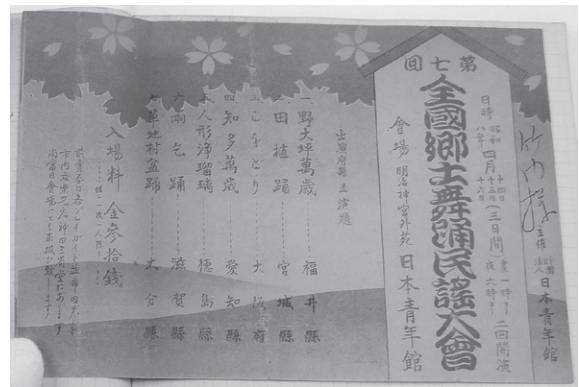


写真3 第7回のチラシ(工学院大学図書館竹内芳太郎コレクション、資料番号 T0008)



写真4 『郷土舞踊と民謡』全10冊(左上から第1回、右下が第10回、個人蔵)

表1 第10回出演者スケジュール（1936年4月、『第十回郷土舞踊関係書類 其一』より作成）

日	時	事項
8日	正午まで	全員到着
	午後1時～4時	下調べ
	午後4時～6時	監督者打合会
9日	午前7時～8時	明治神宮参拝 出演者記念撮影
	午後8時～午後3時	試演、トーキー撮影
	午後3時～6時	放送テスト
	午後7時～10時	試演
10日	午前中	撮影
	午後1時～5時	出演 1日目 8時50分よりAKより放送
	午後6時～10時	
11日	午前中	撮影
	午後1時～5時	出演 2日目
	午後6時～10時	
12日	午前中	レコード吹込（キングレコード社）
	午後1時～5時	出演 3日目
	午後6時～10時	
13日	午前中	市内見学
	正午まで	会食 終って解散

記録には、慰労会で各出演者たちが交流していた様子が描かれている。

流山踊連中の豊年踊、念仏踊連中の盆踊に於て、紋附羽織袴やフロックコートをきた人々が、手拭を頬冠りして真先に立つて唄ひ、且つ踊る天真爛漫な姿の、如何に愛すべき見ものでしたらうか。さうした風流は現今の東京の人の遂に及ばぬところです。また粘土節の連中が、人の國の踊、流山踊を踊りぬいた面白さ。一同思はず拍手喝采を惜しみませんでした。[小寺 1926：31]

短い時間だったかもしれないが、お互いの郷土舞踊を習いあうような各地の青年同士の交流が生まれていたことがわかる。

次に、来場者については、第10回の資料しかないが、3日間6回の公演で、延べ10,100人が来場していたことがわかる。各回1,200～2,000人が訪れており、前述のように大講堂の座席は1,489席だったので、そこそこ盛況だったといえるだろう。「主タル来観者」として、10日の午後6時（招待客のみ）に、森村市左衛門、二荒芳徳、村上恭一、赤星睦治、柳田国男、塚本清治、平沼亮三、山本久三郎、11日午後6時は関屋貞三郎、12日午後6時は二荒芳徳、石黒忠篤、中村孝也の名前があり、財界人、政治家、官僚、学者などが訪れていた（「第拾回全国郷土舞踊民謡大会入場人員調」『第十回郷土舞踊関係書類 其一』所収、日本青年館所蔵）。第7回のチラシには、入場料は30銭とあるが、日本青年館主事の恵美唯義は、座談会で、第1・2回とも無料切符を配ったために、「寄席」に行くような気分で来た客が多かったと発言している[柳田ほか 1928：11]。前述の小寺が宋に宛てた書簡にも、入場料をとるのは無料だと近所の子どもたちなどで満員になってしまうためと記している。ただ、第10回の紹介には、入場無料で初日夜のみ招待日で招待券所持者のみとの案内があり[無記名 1936：4]、料金設定を変えたようだ。

この章の最後に、『日本青年新聞』をもとに、郷土資料陳列所との連携についてみてみよう（郷土資料陳列所の詳細については本報告書論考篇「アチック・ミュージアムと大日本聯合青年団の関連性」参照）。そもそも、「愈々開所公開せらるゝ郷土資料陳列所 十一月二日 盛大なる開所式」（『日本青年新聞』1936〈昭和9〉年10月15日付）によれば、陳列予定のなかにある「信仰」の項目に、「郷土舞踊記録並びに図絵」を紹介することとあり、11月2日に大講堂で開かれる郷土資料陳列所の開所式後の余興では、「武蔵野の舞踊と民謡（囃唄、をどり、車人形）」の出演が予定されていた⁽³⁾。

さらに展示で郷土舞踊と民謡の会を盛り上げていたことが、以下の記事でわかる。

第十回全国郷土舞踊民謡大会の會期中場内の一部に前年の記録を公開し、夜も開いた休憩の時間などはひきもきらず多数の來場者があつた。かうして折につけ識者の認識の廣まつてゆくにつけ、陳列所の内容を更に充實して行きたい。

大会の記録委員の方々は忙しい出演者の合間々々をとらへて毎々人知れぬ苦心と精進を續けられた。既に當所に保管されたものにフィルム四〇〇^{フィート}呎、寫眞六十枚、兼常博士が採録御寄贈下さつたレコード十五枚があるが、舞や踊りの型、伝承、歌謡の採譜等の記録も夫々目下擔當の方々によつて整理されて居る。

延年舞を所演された岩手縣の毛越寺の方々から田樂に使つた笠、太鼓、幣串、採物の花等の寄贈があり、比較的収蔵品の少い藝能史關係の好資料が一つ殖えた。

(「本部のニュース 陳列所」『日本青年新聞』1936〈昭和11〉年5月1日付)

郷土舞踊と民謡の会が様々な方法で記録されていたことは後述するが、それが郷土資料陳列所に保管されて、展示に活用されたり、さらに出演団体から資料の寄贈も受けていたことがわかる。しかし、この第10回で開催が中止、郷土資料陳列所も閉所となってしまうのでさらに展開することはなかった。

『第十回郷土舞踊書類 其一』(日本青年館所蔵)には、各方面への中止についての通知文書が綴られている。1936年9月18日には、「理事長」名で、「道廳府縣學務部長」「朝鮮學務局長」「臺灣文教局長」宛の「郷土舞踊民謡大会ニ関スル件」という文書が起案され、同22日に発送されている。この文書では、郷土舞踊と民謡の会は、「本館トシテハ一通リ所期ノ目的ヲ達シタルモノト認メ」て一旦「打切り」としてこれまでの協力についての謝意を記している。ただし、「伝統的郷土舞踊民謡」について「保存ノ方法」について意見や指導を求める場合は、便宜を図るという文言が最後に補足されている。つまり、日本青年館としては、郷土舞踊と民謡の会は中止するが、各行政に対して保存のための相談に応ずる姿勢を見せていたのである。

同年9月28日には、「柳田 高野両氏へ礼状案」が起案され、10月10日には、放送を通じて全国に知らせてくれた「日本放送協會 事務局長」、ポスターや宣伝に協力した「三越本店營業部長」、さらに陰に陽に援助を受けた人たちとして、折口信夫・兼常清左・北野博美・宮尾しげを・権藤円立・片山春帆・竹内芳太郎・小田内通久・尾形迪吉・河田恵一・蔵田周忠・宜保恵・西角井正慶・高崎正秀・多賀儉太・藤井清水に宛てた「郷土舞踊礼状案」が起案され、同14日には発送されている。このメンバーは、後述するが、民俗芸術の会記録委員として、郷土舞踊と民謡の会の記録化に携わった人たちが中心となっている。

4. 民俗芸術の会記録委員の活動

1) 記録についての着目

郷土舞踊と民謡の会について注目すべきは、様々な記録化が試みられたことである。これは、第3回終了後の座談会で、小寺が、お祭り騒ぎになってしまつて、「例へば記録と云ふようなものは今までちつともない」と発言したことに対して、田沢義鋪が、「専門的な方々のお役に立ち得れば光榮」だとして、「理想を申せば、専門の方々の方で委員會でも設けられ、どう之を利用するが宜

いかに付て案を立て、戴くと、此方も非常に便宜であらうと考へます。」[柳田ほか 1928b: 33]と述べたことに端を発している。これを受けて、民俗芸術の会が記録委員を結成して、日本青年館の協力の下、聞き取りのほか、写真・映像の撮影、実測図、動きのスケッチ、採譜などの方法で記録を残した（写真については資料篇参照）。ただ、その成果は、第4回のものが『民俗藝術』第2巻第6号（1929年）に、第5回の飾山囃子が民俗芸術の会記録委員編纂『日本民俗藝術大観』第1巻「秋田縣角館町飾山囃子記録」（1932年）として発表されたにとどまった。後者は、シリーズで次々と民俗芸能の記録を出版する壮大な計画があったが、実現されなかった。

この記録化については、笹原亮二が指摘しているのが目立つ程度で、これまでほとんど注目されてこなかった[笹原 2008]。それは現物が発見されていないからである。日本青年館には、大日本聯合青年団調査部が作成した、「郷土舞踊の會（第一回-第八回）記録目次」（『第十回郷土舞踊関係書類 其一』所収）という資料目録は所蔵されているが、今回の調査でもそこに記された現物を見つけることはできなかった。しかし、工学院大学新宿図書館が所蔵する、民俗芸術の会記録委員の一人で、民家や劇場建築の研究者であった竹内芳太郎（1897～1987）のコレクションのなかに、郷土舞踊と民謡の会についての実測図やスケッチ、舞踊譜が記されたノートが残されていることがわかった⁽⁴⁾。竹内は、これまで郷土資料陳列所の民家分布図作成者の一人として取り上げられてきたが、このノートによって郷土舞踊と民謡の会とも深いかわりがあったことが明らかになった。

2) 竹内芳太郎と竹内ノートの概要

竹内芳太郎は、今和次郎に師事した民家研究者として知られ、戦前から戦後にかけて農村住宅の改善のための調査研究を続けてきた人物である。戦後は、東京教育大学農学部教授、中部工業大学教授を勤めた。ここでは、晩年にまとめられた『年輪の記』という自伝的年譜を参考に、大正期や昭和戦前期の略歴を中心に確認しておく。

竹内は、1897年に現在の愛知県半田市に生まれた。1917年に早稲田大学高等予科理工科へ入学し、1922年に卒業して同大学理工科建築科へ進学する。ここで、佐藤功一、今和次郎に師事して民家研究の指導を受けるとともに、柳田国男、石黒忠篤、渋谷敬三、大熊喜邦らを紹介され、農村生活や住居改善に関心を持ち、調査を始めたという。同年には、東京市公園課に就職して公園建築を手掛けるが、1926年には三協土木建築事務所の立ち上げに誘われて退職する。

その後は、建築家として活動するとともに、民俗芸術の会の幹事、郷土資料陳列所の設計・展示への参画をはじめ、民家研究会の結成、渋谷敬三の民族博物館設立にも協力していたように、民俗学や日本青年館との関わりが深まっていく[丸山 2013]。

郷土舞踊と民謡の会との関係は、民俗芸術の会を通じてであった。この会は、早稲田グループと呼ばれる早稲田大学関係者と、柳田国男が主宰していた南島談話会が合流してできたゆるやかな団体である[永田 1982]。最初の集まりは、1927年7月8日に開かれ、16名が参加し、小寺融吉と永田衡吉が世話人を務めることとなった。この会から、全48号に及ぶ『民俗藝術』というユニークな雑誌が小寺の編集で発行されることになった（1929年6月以後は北野博美が編集）。

しかし、民俗芸術の会は、早稲田グループと南島談話会以外の多彩な関係者によって支えられてもいた。『民俗藝術』創刊号の「さゝやかな希望」では、民俗学者、文芸家、美術家のほかに、建築家、音楽家といった専門家が参加していると述べられている[無記名 1928: 4]。竹内はこのなかの「建築家」に当たり、他にも今和次郎とその弟子にあたる蔵田周忠・図師嘉彦らのことをさしているであろう。彼らは早稲田大学の関係者であるが、文学・演劇とは異なる立場、いわば建築

学系とでもいうべき人たちである。そうでありながら、後述するように、「まず何よりも、『民俗芸術』は身体運動・音声・造形をいかにして記録するかを試行する場であったのだ」[真鍋2009:241]という真鍋昌賢が評価した側面を具体的に担う重要なメンバーであった。

なかでも竹内は劇場建築にも関心を持っており、北野博美によるすすめで1935年には、『日本劇場図史』第1巻・第2巻(壬生書院)を刊行し[竹内1978:99]、晩年には、『野の舞台』という論文集を出している。

1987年に亡くなった後に、竹内の蔵書と研究資料は、工学院大学に寄贈され、現在は工学院大学図書館に、特別コレクションのひとつである「竹内芳太郎コレクション」として所蔵されている。このなかにあるノート6冊に、1929(昭和4)年から1936(昭和11)年までの郷土舞踊と民謡の会の記録があることが、今回の調査で明らかになった(写真5)。ノートの種類は、「ITOYA」(伊東屋)と「MATUYA」(松屋)のものが各2冊で、それ以外のものが2冊ある。大きさはすべて縦20.0cm、幅16.3cmである。

本稿では、これらを「竹内ノート」と称し、年代別に①～⑥まで資料番号に番号を振った。以下、それぞれの概要を述べた後で、内容を検討したい。ノートには、芸能に関わる記録以外に、見世物小屋や民家の記録、書籍の抜き書きなどがあるが、紙幅の都合上、割愛した。

① T0007

表紙には「2」という数字が振られている。これが竹内によるものであれば「1」も残っている可能性がある。寄贈後に付けられた付箋には、「第3回」「第4回」とあるが、実際には第4回、第5回の記録となっている。前述のように、第4回から民俗芸術の会記録委員が組織され、竹内は日本青年館のバックアップの下で記録化に当たった(写真6)。

② T0004 (伊東屋)

表紙には「3」と書かれているため、①の次に作成されたものだろう。付箋には、「昭和5～7 民俗芸能／大分・山形・和歌山・秩父」と書かれている。これは、1930年の明治神宮鎮座十年祭記念大会に出演した民俗芸能の伝承地域と合致する。「演博」(早稲田大学演劇博物館)と題されたメモや、獅子頭のスケッチの後に、明治神宮鎮座十年祭奉納のスケッチが大部分を占める。その他、「琉球」(「琉球舞踊」という文字を鉛筆で訂正している)というスケッチと、秩父に関する雑誌記事と思しき切り抜きが4枚、「武蔵野芸術大会プログラム」が張り付けられている。続いて「赤塚」「長崎」と題されたスケッチがある。

その後に、横長の民俗芸術の会主催の「歌舞伎音楽鑑賞の夕 番組」(昭和7年9月23日午後五時半より)という催しのパンフレットが挟まれている。

③ T0008 (伊東屋)

表紙の付箋には「第7回郷土芸能大会」とあり、第7回の記録が含まれている。第7回の記録には「竹内様」と記載された郷土舞踊と民謡の会のチラシ(写真3)や、出演者やその監督者と思われる人物の名刺が張り付けられている。

さらにノートの裏から上下逆にして「歌舞伎音楽」と題して、歌舞伎で用いられる楽器のスケッ

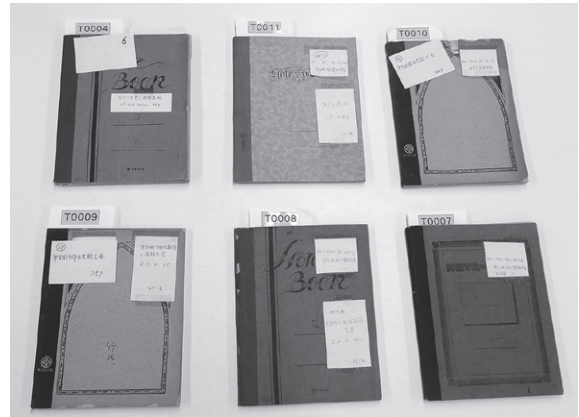


写真5 竹内ノート (工学院大学図書館竹内芳太郎コレクション)

表2 竹内ノートと刊行物との対応

番号	時期	ノートの記録	対応する刊行物
①	1929 年	郷土舞踊と民謡の会 第 4 回	『民俗芸術』第 2 巻第 6 号
①	1930 年	郷土舞踊と民謡の会 第 5 回	『日本民俗芸術大観』
②	1930 年 11 月 2、3 日	明治神宮鎮座十年祭記念大会	該当なし。記録する計画あり (『民俗芸術』第 3 巻 11 号)
③	(1932 年 4 月)	歌舞伎音楽 (楽器)	『野の舞台』
②	1932 年 9 月 23 日	歌舞伎音楽鑑賞の夕	スケッチなし
②	1932 年 (晩秋)	武蔵野芸術大会	該当なし
③	1933 年	郷土舞踊と民謡の会 第 7 回	該当なし
④	1934 年	郷土舞踊と民謡の会 第 8 回	該当なし
⑥	1935 年	郷土舞踊と民謡の会 第 9 回	該当なし
⑤	1935 年 10 月 26 日	民俗芸能大会	『日本民俗』第 5 号
⑥	1936 年	郷土舞踊と民謡の会 第 10 回	該当なし

チがある。これは『野の舞台』に「歌舞伎の下座の音楽楽器実測図」として収録されている。この解題によれば、1932 年 4 月に早稲田大学演劇博物館で下座音楽の楽器が展示された際に、蔵田周忠と「芝浦の高等工芸専門学校」の学生らと実測したものだという〔竹内 1981: 448-449〕。

④ T0009 (松坂屋)

表紙には「第 8 回郷土舞踊と民謡の会／S9. 4. 15／竹内」という付箋と、「第 8 回郷土芸能大会」の付箋がある。内容は、第 8 回 (1934 年) の 4 月 15 日の記録である。

⑤ T0010 (松坂屋)

表紙には「第 9 回民俗芸能大会」という付箋がある。しかし、内容は 1935 年 10 月 26 日に日比谷公会堂で日本民俗協会が開催した「民俗芸能大会」の記録であり、郷土舞踊と民謡の会とは別の催しである。なかには、「茨城四十五景／田楽舞も床し／神秘境 西金砂山」⁽⁵⁾、「大田楽の由来」(西金砂神社々務所) という横長のチラシと、事前に配布されたと思われる二つ折りの「民俗芸能大会」のプログラムが張り付けられている。

⑥ T0011

表紙には、「第 10 回郷土芸能大会」、「民俗民具 (第 10 回)／竹内」という付箋が貼られている。実際には第 9 回と、第 10 回の記録である。

以上がノートの概要であるが、その特徴としては、記録の中心が道具類の実測図であることだ。建築の技能が活かされた精緻な記録で、これらをもとに現在使用されている道具類との比較も可能だろう。

その一方で、文字の記録は少なく、あくまで道具に付随する名称や翻刻やわずかに歌詞のメモのみとなっている。動きを記録する際も分節化した舞踊譜や陣形図などであり、印象記のような主観的な記述は見当たらない。さらに、民俗芸能に関しては、現地に行って描いたスケッチはなく、すべてが舞台上演のものである⁽⁶⁾。このことから、竹内ノートは、竹内が民俗芸術の会記録委員として、舞台上演を記録するために作成されたという性格が強いことがわかる。

そこで、表 2 で、竹内が鑑賞したと思われる催し物を抽出し、実測図やスケッチがある場合は、『民俗芸術』『日本民俗』『日本民俗芸術大観』『野の舞台』掲載図版とどのように対応するかを示した。

3) 民俗芸術の会の活動

次に第 4 回と第 5 回を取り上げ、記録化の全体とその分担を明らかにする。これによって、竹内ノートの位置づけが明確になるだろう。

『民俗藝術』第2巻第6号は、「郷土舞踊と民謡」という特集号で、第4回についての報告と、民俗芸術の会の面々や観客として来場した人びとが寄稿した文章で構成されている。その巻頭には、23ページにわたって、スケッチ、実測図、陣形図、写真によって各民俗芸能が報告されている。そのなかの、身体技法のスケッチは蔵田周忠、宮尾しげを、道具と陣形図は竹

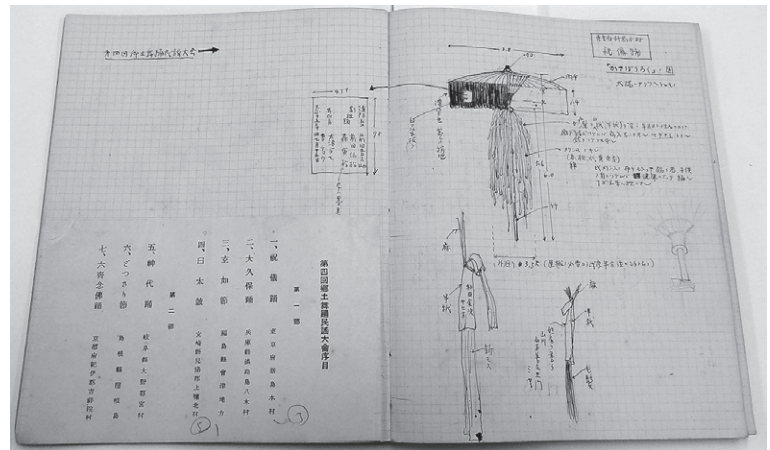


写真6 第4回の「祝儀踊」の「かさぼうろく」（工学院大学図書館竹内芳太郎コレクション、資料番号 T0007）

内と図師嘉彦が担当していた（写真6）。宮尾しげをは漫画家・芸能研究者であるが、蔵田と図師は竹内と同じく今和次郎に師事していた建築家・研究者である。つまり、文章以外の情報は、ほとんど早稲田大学建築学系によって作成されたものだった。

次に、『日本民俗藝術大観』第1巻「秋田縣角館町飾山囃子記録」を見てみたい。ここにも竹内の道具の実測図が多用されているが、興味深いのは、踊りをいかに分節化して記録するかに腐心していることだろう。身体の動きを簡略化して示した舞踊譜を竹内が描き、足どりは図師嘉彦、イラストと文章の解説を小田内通久が担当し、さらには宮尾しげをの紹介で幸内純一⁽⁵⁾が写真を撮り、スケッチを尾形迪吉が描いている。北野博美によれば、「各自がその体にも習得してその補ひとしたのであつた」というように、実際に踊りを教わって覚えながら、記録作成に当たったという〔北野 1932：41〕。まさに、短時間での記録化のためにあらゆる手段を尽くしたといえる。

この本の中に、「忘れ物をした飾山囃子」という竹内の短文がある。ここで竹内は、あらゆる造形物に尺度をあてて寸法を記録し、形のスケッチを残すことが自分たちの仕事で、技術の発展の寄与することだと述べている。しかし、そのあとにそういった使命感があるにもかかわらず、今回の飾山囃子の記録では、肝心の飾山が、大きいために日本青年館まで運んでくるができなかったもので、詳細がわからなかったと吐露している。

此意味に於て私は日本青年館の場合だけでは殆ど徒勞に近い仕事をしている。私は中心造型物たる飾山を滅茶苦茶に解體してさらけ出してみたかつた。〔竹内 1932：23〕

そして、そのような正確な記録をとれば比較研究もできるし、踊りの構成の理由について建築上の説明もできるうえ、祭りらしさの気分までもが明らかになったのではないかとしている。

この竹内の短文が興味深いのは、実測図に基づく客観的な記録を行う記録者として、モノを通じて民俗芸能の性格を補足しようとする意志がうかがえることだろう。笹原亮二は、『日本民俗藝術大観』の試みを、「目の前で演じられる現実の補足の試行錯誤」とであると、暫定的な試みであることの自覚を評価している〔笹原 2008：7〕。だが、まず考えなければならないのは、これが郷土舞踊と民謡の会という舞台化を前提に成り立つ記録であったということだろう。それは、現地の再現でありながら、時間や環境の制約や、東京の舞台に臨む出演者のいつもとは違った趣向といった、払拭できない舞台化ならではの要素を常に呼び込むものである。竹内の短文には、そのなかで

記録することの困難さが表明されていると考えるべきだろう。

一方で、舞台化を常に不完全な上演とし、現地と切り離して考えるような志向もここから読み取ることができる。現地において“本物の飾山”を記録さえできれば、その祭りのすべてを手中に収めることができるかのような主張がそれだ。モノを正確に記録できるということは、そこで行われる人間の営みを捉える視点の一つではあるが、それですべてを把握できるということではないだろう。

ただ、民俗芸能という、現在では「無形」と見なされることの多い対象に、モノからアプローチしようとした試みがこの時期に間違いなく存在したことは重要だろう。しかも、それを具体的に担っていたのは、竹内をはじめ、今和次郎門下の建築に関わる技能を有する研究者であった。

このことを考えるうえで竹内の師である今和次郎が、「信仰祭礼関係の物」について触れた文章は示唆に富む。今は、民俗芸術の研究は「無形」が盛んで造形美術は手薄だと指摘し、その理由について物質的資料は変化しやすいためだと述べる。そのなかで、この特集では、いかに「無形の即ち形のない芸術」と提携していくかを考えて取り組み、そのなかで「お祭り」に関するものが目論見と合致したという。そこで今は、「信仰祭礼関係の物はいくらでもさかのぼれるのに、日常生活関係の事は日々の変更で、あるくぎりでさかのぼる事はできない」[今 1928：102]という見解を述べる。

竹内ノートを、今の見解を踏まえてみると、「無形」と「造形美術」が密接に関係しあう側面を、その弟子たちが民俗芸術の会を通じて、民俗芸能という領域において記録に取り組んでいた成果と位置づけることができるだろう。

5. おわりに

郷土舞踊と民謡の会は、理念としては地方青年の健全な娯楽の振興を掲げていたが、実際には日本青年館という帝都東京のモダンな空間において、都会人が地方・植民地の民俗芸能を鑑賞する催しとしての性格が強かった。しかし、日本青年館・大日本聯合青年団という組織が推進する事業であったために、多彩な研究者がそこに関わることもでき、様々な記録化がなされた。このことは現在の民俗芸能大会の起源ということのみならず、行政と連携して行われる「地域おこし」を標榜する様々なイベントや、調査事業などの先駆けともいえるだろう。特に竹内ノートや資料編で紹介する写真といった記録は、当時と現在を比較できる重要な資料であろう。

ただ、本稿では、早稲田大学建築学系以外の宮尾しげを、小田内通久といったスケッチを描いた人物や、兼常清佐や藤井清水といった音楽学・作曲家らが採譜に協力していたことの意義について触れることができなかった。また、映像撮影やラジオ放送についても映像や音源が現時点では発見されていないため、直接の検討は難しいが、メディア史などを踏まえて歴史・社会的な状況のなかに位置付けるというアプローチの余地はある。

最後に改めて指摘しておきたいのは、出演者たちが互いの民俗芸能を演じ合ったり、記録するなかで研究者自身が自ら習い覚えようとしたりするような機会がこの催し物を通じて生まれていたことである。これは、都会人が地方や植民地の民俗芸能を鑑賞する「見る一見られる」という非対称な関係だけでは見落してしまう舞台裏の瞬間といえる。このような経験は、現地から離れて催し物に参加したからこそ可能になるものであり、出演者だけではなく主催者に近い側にとっても貴重なことだったはずだ。そのような具体相を救いあげることが、今後、郷土舞踊と民謡の会を同時代および現在から評価するために必要だろう。

注

- (1) このほか関連行事として、1930年11月3日に、明治神宮鎮座十年祭奉祝行事として「神賑（神事舞）」が行われ、7つの民俗芸能の公演が日本青年館で行われている。
- (2) 宋錫夏宛・小寺融吉書簡（1933年8月1日消印、朝鮮国立民俗博物館所蔵）。この資料の存在は全京秀氏（ソウル大学名誉教授）にご教示いただいた。記して感謝いたします。
- (3) 車人形は八王子の車人形のことだろう。八王子の恩方村にいた松井翠次郎が青年団運動に関わっていたと関係があると思われる〔山口 1995〕。
- (4) 丸山泰明氏のご教示。
- (5) 『日本民俗』第4号（1935年）の別刷として折り込まれているものと同じものである〔小川監修 2017〕。
- (6) 民俗芸能の会で1929年に行なった赤塚の田遊びの調査には参加し、挿画を描いているが、その内容はノートには見られない〔図師ほか 1929〕。
- (7) 日本における最古のアニメーション映画のひとつ、『なまくら刀』（1917年発表）の制作者である〔津堅 2005：58〕。時事漫画を描いていたことから宮尾と親交があったのだろうか。民俗芸能の会の記録が、当時の映像表現とも連動していたものであることを示している。

参考文献

- 小川直之監修 2017 『日本民俗 復刻版』 クレス出版
- 小川直之 2019 「折口信夫と民俗芸能上演」都市民俗学研究会編『都市民俗研究』第24号都市民俗学研究会
- 掛谷昇治 1996 「日本青年館と柳田国男」柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房
- 川村清志 2006 「「民俗芸能」を分節化するまなざし」『大阪大学日本学報』第25号
- 館史編纂委員会・編纂作業委員会編 1991 『財団法人 日本青年館七十年史』財団法人日本青年館
- 神田海之助編 1934 『郷土舞踊と民謡』（第8回）日本青年館
- 北野博美 1932 「「三本竹」踊りの譜解説」（注記）『日本民俗藝術大観』第1巻「秋田県角館町飾山囃子記録」郷土研究社
- 木原弘恵 2015 「文化財指定と「担い手」の実践——二つの踊りの来歴をめぐって」『関西学院大学社会学部紀要』第121号
- 熊谷辰治郎 1928 「「郷土舞踊と民謡の会」の回顧」『民俗藝術』第1巻第4号
- 熊谷辰治郎 1942 「回顧二十年」大日本青年団編『大日本青年団史』大日本青年団
- 熊谷辰治郎 1979 「日本青年館と民俗芸能」『民俗芸能』30
- 久万田晋 2007 「琉球芸能における諸概念の形成過程」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』第19号
- 小寺融吉 1926 「花やかなりし思ひ出」『青年』第12巻第6号
- 今和次郎 1928 「編集後記」『民俗藝術』第1巻第11号
- 笹原亮二 1992a 「引き剥がされた現実——「郷土舞踊と民謡の会」を巡る諸相」上野誠編『共同生活と人間形成』教育文化研究所
- 笹原亮二 1992b 「芸能を巡るもうひとつの「近代」——郷土舞踊と民謡の会の時代」
- 笹原亮二 2008 「演じられる現実に注いだ眼差し——「郷土舞踊と民謡の会」と研究者たち」『民博通信』No.120 国立民族学博物館
- 島蘭進 2019 『明治大帝の誕生』春秋社
- 新藤浩伸 2014 『公会堂と民衆の近代』東京大学出版会
- 図師嘉彦ほか 1929 「武蔵赤塚村諏訪神社田遊び祭りの記録」『民俗藝術』第2巻第9号
- 鈴木正崇 2015 「「民俗藝術」の発見——小寺融吉の学問とその意義」『明治聖徳記念学会紀要』第52号
- 大日本青年団編 1942 『大日本青年団史』大日本青年団
- 竹内芳太郎 1978 『年輪の記 ある建築家の自画像』相模書房
- 竹内芳太郎 1981 『野の舞台』ドメス出版
- 竹内芳太郎 1932 「忘れ物をした飾山囃子」『日本民俗藝術大観 第1巻 秋田県角館町飾山囃子記録』郷土研究社
- 館野太朗 2019 「民俗芸能の大正」都市民俗学研究会編『都市民俗研究』第24号 都市民俗学研究会
- 津堅信之 2008 『アニメーション学入門』平凡社
- 永田衡吉 1982 「回想の「民俗芸術」」『民俗芸能・明治大正昭和』錦正社

真鍋昌賢 2009 「民俗芸術をめぐる想像力」小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房
丸山泰明 2013 『渋沢敬三と今和次郎』青弓社
民俗芸術の会編 1929 『民俗藝術』第2巻第6号
民俗芸術の会記録委員編 1932 『日本民俗藝術大観 第1巻 秋田縣角館町飾山囃子記録』郷土研究社
無記名 1926a 「皇太子殿下の臺臨を忝うして」『青年』第11巻第5号 日本青年館
無記名 1926b 「館だより」『青年』第11巻第6号 日本青年館
無記名 1928 「さゝやかな希望」『民俗藝術』第1巻第1号
無記名 1936 「日本青年館の全國郷土舞踊民謡大会の曲目」『日本民俗』第10号 日本民俗協会
柳田国男ほか 1928a 「郷土舞踊と民謡合評會」『青年』第13巻5月号 日本青年館
柳田国男ほか 1928b 「郷土舞踊と民謡合評會（二）」『青年』第13巻6月号 日本青年館
山口昌男 1995 『「敗者」の精神史』岩波書店
山崎達哉 2016 「佐陀神能の変化とその要因に関する研究——神事と芸能の二面性」『待兼山論叢 文化動態論篇』第50号
渡辺裕 2018 「趣味・娯楽——民衆文化再編成への胎動」鷺田清一編『大正＝歴史の踊り場とは何か』講談社